

## 墓前礼拝

### パンを水に流す

大学宗教センター長 栗原 健

**あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。  
月日がたってから、それを見いだすだろう。**

#### コヘレトの言葉 11章1節

今読みましたコヘレトの言葉は、古代の中東ではよく知られた諺だったようですが、一見しただけでは意味が分かりにくいです。パンを水に流して何の役に立つのか。それが後で見つかるとは、何を指すのか。実になぞなぞのような言い方ですね。そのため、この言葉については古くから様々な解釈があります。

一般的な理解としては、このように言うことができます。「神のために、無駄と思えることでもやってみなさい。力を注いでみなさい。当座のうちは実を結ばないように思えるかも知れないが、後になってからその実りを得ることになるだろう。」なかなか芽が出ないように見えても、それは決して無駄になることはない。あきらめてはいけない。そのようにこの言葉は励ましてくれます。

私がこの言葉を選んだのは、宮城女学校の初代校長であるエリザベス・プールポーが書いた手紙の中に、この言葉が引用されているからです。

プールポーが校長職を務めた7年間は、苦勞の連続でした。ゼロから日本人向けのカリキュラムを作り、西洋風の校舎を建て、キリスト教に対する逆風が強まる中で女学校を運営して行くということは、並大抵のわざではありません。さらに、これはプールポー自身も認めていることですが、熱心な学習にもかかわらず、残念ながら彼女の日本語能力はあまり伸びませんでした(『E・R・プールポー書簡集』宮城学院、252頁)。このため日本人と十分理解し合うことができず、互いに不信感を持つこともしばしばありました。

そうしたストレスが爆発したのが、開校から6年目に起きたいわゆるストライキ事件です。生徒5名の退学という形で終わったこの騒動の後、プールポーは校長職を続けて行くことに困難をおぼえるようになり、まもなく退職を願い出て翌年(1893年)夏にアメリカに帰国します。その頃に彼女が書いた手紙を読みますと、現代で言う「燃え尽き症候群」、バーンアウト状態であったことがうかがえます。

そのような辛い状況の中でも、プールポーには神に感謝することがありました。退職を申し出る1か月前の1892年6月2日、プールポーは、自分の生徒たちの様子を手紙に書き記しています(『プールポー書簡集』246頁)。教え子たちのうち、数名は

地域の日曜学校で熱心に働いており、別の 1 人はバイブル・ウーマン(地域の教会等の働きを助ける伝道者)として活躍するようになっていました。彼女たちの働きぶりを説明しながら、プールポーは、「このように、水の上にまかれたパンは私たちに戻ってきます」と述べています。これはもちろん今日の聖句に基づく言葉です。

気落ちしていたプールポーにとって、こうした小さな成果であっても、「パンが戻って来ている」しるしとじて励まされたのでしょうか。実際、彼女が流したパンは、137 年たった今でもなお大きく戻り続けています。まさに「涙と共に種を蒔く人は 喜びの歌と共に刈り入れる」(詩編 126 編 5 節)恵みそのものと言えます。

ここで考えたいことがあります。私たちもまた、毎日働く中で疲れやフラストレーションを覚えることがあります。いくら力を注いでも、芽が出ないように見える。何も変わらないように思える。或いは、日本語が上達せずに悩んだプールポーのように、自分の能力の限界にぶちあたり、がっかりしてしまうこともあるかも知れません。「いくら頑張っても無理だ。所詮、無い袖は振れないじゃないか」と思うこともあるのではないのでしょうか。

けれども、「パンを水に流す」ということは、まさに無駄のように感じることを指します。そうした辛さの中を歩いて行く中で、私たちは、自分の力の小ささを知って行きます。神の計画とは、決して自分の小手先の能力や才覚によるものではなく、ただ神の恵みによって実現するものなのだ、私たちに必要なことは、悩み迷いながらも神を信じて歩み続けることなのだ、ということを見出して行きます。「神の時」を待つことも信仰だからです。

その時には、私たちは自分の無力さや失敗、迷いをも神への捧げものとして、差し出すことができるでしょう。私たちは、自分の成功を捧げものにすることはできません。それは元々私たちのものではないですし、それではパンを水に流したことにはならないからです。

この創立記念日にあたって私たちは、プールポーたち創立者の苦労を思い起こすと同時に、コヘレトの言葉が示してくれる恵みの約束を心にとめて、へりくだりたいと思います。伝道者パウロも言っています。「たゆまず善を行いましょ。飽きずに励んでいれば、時が来て、実を刈り取ることになります」(ガラテヤの信徒への手紙 6 章 9 節)。そのように、これからも一緒に子どもたち、若者たちを支えて行きましょ。

(2023 年 9 月 16 日)